The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞伊井春樹著『紫式部の実像　稀代の文才を育てた王朝サロンを明かす』
Author(s)	飯田, 実花
Citation	語文. 2024, 123, p. 41-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100243
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

伊井春樹著『紫式部の実像　稀代の文才を育てた王朝サロンを明かす』

飯田実花

本書あとがきにて伊井氏は、「かねてから不思議に思っていた」疑問を提示している。「受領階級の娘である紫式部が、漢籍の知識をもっていたのは、父為時の存在によって理解できるにしても、『源氏物語』に盛り込まれた有職故実から宮中文化、貴族の諸相に至る詳細な内容は、どのような方法で知りえたのか」。『源氏物語』を読んだ誰しもが抱きうるこの疑問に対し、「具平親王」の存在を補助線として引くことで解明を試みたのが、本書である。

本書は全十二章で構成される。一章「セレブ二人の間を取りもつ」では、具平親王女隆姫と道長男頼通の婚姻について、道長が紫式部に仲立ちを求める、『紫式部日記』の場面を解説する。時の権力者である道長が、息子の婚姻において、なぜ一介の女房に仲立ちを求めるのか。それは具平親王が「そなた（＝紫式部）の心よせある人」と道長が考えたからであった。では、具体的に具平親王と紫式部との間にはいかなる関係があったのだろうか。

紫式部は現代において専ら「『源氏物語』の作者」として紹介されるが、彼女はそのほかにも様々な側面を持つ。二章以降では、そうした各側面から紫式部の実像が追い求められている。二章「具平親王文化サロンと父たち」、三章「父為時の官僚生活の悲運」、四章「紫式部の少女時代」では、紫式部の血縁関係がクローズアップされる。藤原為時の娘である彼女は、藤原為頼（為時弟）の姪であり、具平親王とは祖母同士が姉妹の間柄でもある。叔父為頼は、具平親王家で開催される詩会や歌会に出入りしていたと考えられ、為頼の死に際した具平親王の哀悼の歌も残っている。為頼の死に関しては、従来宣孝との結婚のためとされてきた紫式部の越前からの帰京について、叔父為頼の喪に服す目的もあったのではないか、と新たな観点を導入している点も重要である。父為時は、『本朝麗藻』所収の詩から具平親王家の家司であったと推察され、漢学者として儒学を用いて仕えていたという。為時・為頼兄弟は、遠縁にあたる具平親王と親密な関係にあり、これが紫式部と具平親王の関係性を構築したとする。特に四章では、紫式部が箏の琴の伝授を具平親王から受けた可能性も指摘されている。

五章「為時の越前守赴任」では、為時の娘としての紫式部という側面が取り上げられている。この章では、為時の人間関係もさることながら、受領階級の境遇、そしてその娘としての生き方が論じられる。六章「為時の任務と宣孝との結婚」では、父為時や夫宣孝の実務に触れながら、娘として、妻として、それらと紫式部がどのように向き合ったのか、『紫式部集』の歌の解釈を中心に分析される。

二章～六章が紫式部を縁戚関係から解き明かしたものであるとするなら、七章以降の各章は、女房という側面から紫式部を写したものと言えよう。七章「女房の生活」では、貴顕に仕える女房

の生き方が解説されている。女房集団として、一つの文学サロンとして、大斎院選子内親王の女房たちが和歌・物語を愛好し、多くの物語が収集・書写される環境にあったことは注目に値しよう。

紫式部はなぜ中宮彰子の女房となったのか。この点を考察しているのが、八章「紫式部の宮仕え」である。疫病が盛んになり、皇后定子、東三条院詮子が相次いで亡くなる社会のなかで、紫式部は娘の将来を案じ、「若紫物語」を執筆した。それは周囲で評判となり、具平親王にも、具平親王の姉である選子内親王にも伝わったであろう。その評判が道長の耳にも入り、出仕につながったのではないか、というのが伊井氏の指摘である。

九章から一一章では、『紫式部日記』を中心に、女房として生きる紫式部の姿を解説する。九章「紫式部の宮中生活」によれば、出仕に不安を抱えていた紫式部は、その生活のなかで処世術を見いだし、彰子に「楽府」を進講するなど、徐々にその才を発揮していく。そのように文才によって仕えることこそ、「若紫物語」によって評判となった紫式部を彰子の女房に加えた、道長の意図であった。一〇章「中宮彰子御産による敦成親王誕生」では、その文才を遺憾なく発揮した「仮名の御産記録」の作成が、『紫式部日記』の目的であったとする。

一一章「献上本『源氏物語』」では、まず『紫式部日記』のなかでも物語への言及が見られる場面を取り上げる。徐々に出来あがる物語がいかに書写され、製本され、流布したのかを明らかにしている。後半では『紫式部日記』に見える女房批評に言及し、彰子の女房集団が、定子サロンや大斎院選子サロンと比較される環境にあったこと、そのなかで『紫式部日記』によって対外的に彰子女房集団の文化的素養の高さを主張していたことを示している。

一介の女房がいかに没したかを知るのは困難を極めるが、様々な資料から少しでも解明しようとしたのが、一二章「その後の紫式部」である。寛仁四年九月まで、藤原実資の「心寄せの人」として取次の女房であったことを確認したうえで、『大弐三位集』に見える、紫式部の娘賢子と父為時の贈答から、寛仁四年末か、その翌年頃に五一か五二歳で没したとする。

「稀代の文才」紫式部は、具平親王文化サロンとの密接な関係のなかで育った。そのうえで、彰子のために優秀な女房が集められた彰子サロンのなかで文才は発揮され、定子サロン・大斎院選子サロンと比較されることで、その才はさらに磨かれていった。紫式部を取り巻いた環境から実像の解明を試みた本書は、紫式部のみならず、当時の社会における受領階級の娘の生き方、貴顕に仕える女房の生き方をも明らかにしており、平安朝の社会の在り方を理解するためにも重要な位置を占める書と言えよう。

（朝日新聞出版、二〇二四年二月、三五〇頁、一、八〇〇円＋税）

（いいだ・みか　本学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）